丸三電機 2

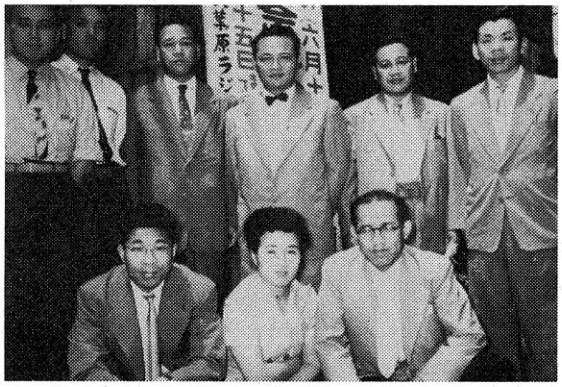
原点はアキバ

丸三電機の社長室に1枚の肖像写真がある。創業者の田中キヨ子だ。現社長の竹村元秀にとっては父方の叔母で1995年に75歳で亡くなった。

終戦直後、夫を戦争で亡くした田中は生計を立てるため、東京・神田須田町の路上で電子部品を売っていた。ところが49年に連合国軍総司令部（GHQ）が露店撤廃令を発表。途方に暮れた田中は他の露天商9人とともに東京・秋葉原の高架下に店舗を構え、「ラジオストアー」として創業した。当時田中は29歳。創業者の中で紅一点だった。

やがて朝鮮戦争の特需や高度経済成長に伴う好景気が到来。ラジオストアー内は地方の電気店関係者や一般客で、身動きが取れないほどあふれかえる。小学5年生の時に奈良県から叔母を訪ねた竹村にも「毎日がお祭りのよう」な姿は鮮烈な印象を残した。やがて立ち上げメンバーらは同所での販売だけでなく、自分から売り込むため相次いで別会社を設ける。田中も63年、電子部品商社として丸三電機を創業した。

竹村は大学に通うため71年に上京し、田中の家に住み込んだ。丸三電機やラジオストアー内の店舗でアルバイトをするうち「ここで働きたい」との思いが湧く。田中にぶつけたところ「まずは修行してから」と諭され、ラジオストアー出身企業の一つに就職を決める。



▲……秋葉原ラジオストアーの創業者たち（前列中央が丸三電機創業者の田中キヨ子さん）

高度成長から石油危機

衝撃的な告白

ところが卒業を間近に控えた75年の初め。丸三電機の給料日である25日に大学から帰宅した竹村は、仏間に田中がいるのに気づく。手には二つの給料袋がある。「どうしたの」。違和感を覚えた竹村は声をかけた。ばつの悪そうな表情を浮かべた田中から聞き出した話は、衝撃的だった。

石油危機のあおりを受けて丸三電機の売り上げは激減。田中は自らの給与をゼロにしたが、両親には心配をかけないため、店舗からの給与の一部を丸三電機の給料袋に移し替えて渡していた。丸三電機は社長が自分の給与も捻出できない状況なのか―。「他社に勤めている場合ではない。一日でも早く風を吹かせてみせる」。そう宣言して大学卒業2日後の3月3日、丸三電機に飛び込んだ。

厳しい現実

しかし現実は厳しい。休眠顧客の名刺を引っ張り出し、車で走り回った。母方の叔父から受けた「自分の稼ぎで社員を何人養っているかを意識せよ」との教えを守り、ノートに自らの売り上げや交通費、人件費などを毎日書き込んだ。やがて成果が出るようになると、今度は社内の上層部に竹村を面白く思わない人が出てくる。

「こんな会社では駄目だ」。不満を田中に並べ立てた。田中は言い分を聞くとこう叱った。「なぜ上のせいにするの。『丸三電機は竹村で持っている』と認めさせようと思わないの」。人を悪く言うな、きっと分かる時が来る。そう言い聞かせていた田中は90年、突然竹村を社長に指名する。竹村が39歳の時だった。（敬称略）

勝つ 中小企業のものがたり

会社に飛び込み「風吹かす」

中堅・中小・ベンチャー